

## オリズルスミレの栽培記録

世 羅 徹 哉

オリズルスミレ (*Viola stoloniflora* Yokota et Higa) は1982年に沖縄県で発見され、1988年に新種として記載された種である。日本産スミレ属植物の中では最も小型の部類に入る常緑多年草で、約2年半の間当園で栽培した株の形態は以下の通りであった。

地上には明瞭な茎はなく、長さ約1cmの地下茎がある。葉身は長さ8~16mm、幅7~16mmの心臟形で先はやや鋭形または鈍頭、表裏面とも無毛で、粗い鋸歯がある。淡緑色地に脈上がやや濃色のため不明瞭な網目模様があるように見える。また、基部近くの脈は紫褐色を帯びる。葉柄の長さは5~25mm、紫褐色で、微毛を密生する。たく葉は長さ2~4mm、鎌形状狭卵形または披針形、房状で鋭形。ストロンは長さ3~6cm、直径約1mm、無毛、紫褐色。先端はロゼット状に小さい葉をつけ、その葉腋にも花をつける。この先端部は地面に接するとやがて発根して子株となる。ストロンの中間やや先寄りに1~2個の鱗状葉があり、この葉腋に花がつくことがある。花は點頭し、長径約15mm、白色で下側3枚の花弁基部脈上には青紫色の数本の条線がある。花柄は長さ1~6cm、微毛を粗生する。淡い黄褐色または淡い紫褐色で、上部に2枚の包葉がある。包葉は長さ約3.5mm、披針形で鈍頭。がく片は無毛、披針形、長さ約4mmで付属体は長さ約0.5mm。上側2枚の花弁は長さ約9mm、幅約3mmの長楕円形、鈍頭。側位にある2枚は長さ約10mm、幅約2.5mm、長楕円形、鈍頭。下位の1枚は長さ約10mm、幅約3.5mm、倒披針形で、先は浅く2裂する凹形。距は長さ約2.5mm。花柱は長さ約1mm、こん棒状で、先端は倒三角形に広がり、平坦。柱頭はくちばし状にやや突出した角にある。雄蕊は5。さく果は長さ約4mm、無毛で中には長径約1mmの種子が8~20個ある。

以上の形態的特徴は本種の原因記載にほぼ一致した。しかし、当園で栽培したものの葉は、最大径16mm(葉身)、最大長25mm(葉柄)と原記



オリズルスミレ

載にくらべ大きかった。

本種の外見は、ヤエヤマスミレや、ヤクシマスミレによく似るが、ストロンを伸ばすことで容易に区別される。一方、ストロンを出す種としては、同じ沖縄県からオキナワスミレが知られているが、本種とは、葉の形、花の色、花柄の微毛、全体の大きさなどで明らかに異なっている。なお、学名は、ストロンに直接花がつくという本種の特徴を表したもので、和名は、ストロンがのびて子株を作った状態を折鶴にみたてたものである。

本種は、1982年、沖縄県北部の辺野喜川中流の溪流沿いで、比嘉清文氏によって初めて発見、採集された。その後沖縄県で栽培され、実生または株分けで増殖された固体に基づき、琉球大学理学部の横田昌嗣博士らによって記載、命名された。本種は、亜熱帯地域でありながら夏季冷涼な山間の溪流沿いに成育していたためか、栽培上は、夏の暑さに弱く、沖縄では充分増殖させることができなかった。そこで、横田博士が当園に冷房温室のあることを御存知だったこともあって、横田博士より当園に本種の栽培および増殖の依頼があった。依頼されたのは2個体で、1986年8月に横田博士が持参された。これらは、後に基準正標本(holotype)となった個体から株分けで殖やされたもので、meroty-

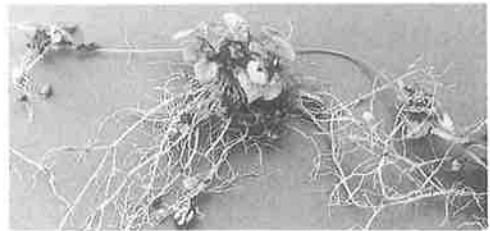
peにあたる。

栽培は、沖縄での経験から、セントポーリアの要領で行った。用土には、バーミキュライト(5)、ピートモス(3)、日向土小粒(2)の混合土を用い、プラスチック製の丸型5号鉢に1株ずつ植えた。これらを冷房温室(室温15~25℃、湿度60%以上、約60%遮光下)に置き、常に用土が湿っているようかん水した。特に施肥はしなかったが、毎月1回、殺虫、殺菌剤にハイポネックス原液(1000倍)を加えて散布した。2株とも、1986年9月に生長を始め、1987年にかけてストロンを伸ばし、先に子株を形成した。同3月には初めて数輪が開花した。同6月、鉢土の表面にヤマゴケ(せん類)や水垢(藻類)が繁殖して生長が止まったので新しい用土で植え替えた。その後成育は良好となり、10月にも数輪が開花した。1988年は、3~4月にかけて開花したが、5月には前年と同様に生長が止まり、枯死する子株もあったため、再度新しい用土で植え替えた。同9月下旬、各鉢内に子株が密生状態となり、表面に水垢が出始めたので植え替えと同時に株分けを行った結果、15個体、13鉢になった。このうち、1個体は、横田博士の了解を得て国立科学博物館筑波実験植物園に分譲

した。

本種の自生地は、これまでのところ先述の辺野喜川流域しか知られていないが、その自生地は、1984年にダム建設の目的で樹木が皆伐されたため、本種は死滅したと思われる。一方、沖縄で栽培されていた株はすべて枯死したため、現存するオリヅルスミレの生きた株は、当園の14個体と筑波実験植物園の1個体だけになってしまった。当園の個体は、1989年3月現在良好な状態にあり多数の子株を生じているので、本年5月には株分けを行ってさらに増殖し、9~10月に沖縄に里帰りさせる予定である。

最後に、この貴重な植物を育てる機会を与えて下さった琉球大学理学部助手、横田昌嗣博士に感謝の意を表します。



オリヅルスミレ  
(ストロンを伸ばした状態)

### 園内気象記録

昭和63年1月1日~12月31日

月別	気 温		湿 度	降水量
	平均最低	平均最高	平均最低	
1月	2.3℃	7.4℃	64.8℃	20.0mm
2月	-0.5	8.4	53.3	44.0
3月	2.5	11.1	58.0	165.0
4月	6.9	17.6	74.1	133.0
5月	12.4	21.1	80.3	335.0
6月	17.5	25.6	65.3	(374.5)
7月	22.1	28.8	45.8	218.0
8月	22.2	33.5		20.0
9月	18.6	27.4		162.0
10月	12.2	22.0		(66.0)
11月	4.6	15.1		(16.5)
12月	1.0	11.1		(7.0)
計				1561.0

( ) は広島県気象年報(1988)の数値。

<参 考>

最低気温記録日 2月5日 -5.7℃

最高気温記録日 8月9日 33.9℃

最大雨量記録日 6月2日 107mm

観測場所についてはこれまでの記録と同じであるが、8月~12月の平均最低湿度は計測値不良のために掲載しなかった。(渋谷寿伸・在岡孝行 記)